Osaka Shoin Women's University Repository

松浦宮物語における「なまめかし」について

北村英子

「松浦宮物語」の現存本三巻は、「無名草子」の記事から想定して、藤原定家作[注①]とする説が今日では動かし難い有力な説となっている。であるから、その成立は鎌倉初期のものであると推定するのがより妥当のようである。

筋としては、弁少将橘氏忠が神南備女王に恋するが、やがて失恋した少将は両親を残して遣唐副使に立つ。唐では反乱がおこったが少将は奮戦してそれを鎮圧し、后などと契りを結ぶという物語である。

このような内容を有する「松浦宮物語」は「宇津保物語」「浜松中納言物語」の影響が濃く、和歌文学の世界においては特に万葉調の歌風が濃厚にみられ、作者が擬古的意図をもって創作したものであると考えられる。このように王朝物語を模倣して創作された作品「松浦宮物語」中において、王朝物語作品圏に顕著にみられた「なまめかし」美がどのように影響されているか検討してみたい。

(1)大将ことしぞ四十六に成給ふ。さかりにきよげにて。うす色のかたもんのさしぬきに。もえぎの御なをし。うすいろくれなゐなど。わざとならぬしもいみじうめでたし。みこは三十四に成給ふ。しろき御ぞどもに。うす色もえぎなど。ことなる色あひならねど。かぎりなくあてになまめかしき御さまなり。

以上「松浦宮物語」中に認められた「なまめかし」の用例はただこの一例のみであった。形容詞の連体形で表白されている美的語詞であるが、これを仔細に検討し、その美的構造を追求してみたい。

まず前記の用例(1)中には男性である大将を讃美する描出の部分と、女性である皇女(みこと)を讃美する描出の部分とがある。今ここで、男性である大将の美的描写と、女性である皇女の美的描写の相違を比較対照して論じてみたい。すなわち、男性である大将を讃美する描出の部分は、

○大将ことしぞ四十六に成給ふ。さかりにきよげにて。うす色の

Osaka Shoin Women's University Repository

かたもんのさしぬきに。もえぎの御なをし。うすいろくれなゐなど。わざとならぬしもいみじうめでたし。

とあり、女性である皇女を讃美する描出の部分は、

○みこは三十四に成給ふ。しろき御ぞどもに。うす色もえぎなど。ことなる色あひならねど。かぎりなくあてになまめかしき御さまなり。

とある。これは「松浦宮物語」の「船出」の編中における美意識を豊潤している人物描写の箇所である。この両人物における美的構造を諸要素ごとに分析して表示し、もう少し詳密に各々の人物の美を追求してみることにする。

人物	○大　将	○皇　女
性別	○男	○女
年齢	○四十六	○三十四
衣装	○指　貫 ○直　衣 ○下　襲	○御　衣 ○下　襲
色彩	○薄　紫 ○萌　黄 ○紅	○白 ○薄　紫 ○萌　黄
美的語詞	○きよげに ○めでたし	○あてに ○なまめかし
備考	○男盛り ○事々しいお召し物でない。	○格別目立った色合いではない。

この表示から大将と皇女の両人物の美的構造の特質を比較検討して把握してみたところであるが、要するに、男性である大将は四十六歳という男盛りで、指貫・直衣・下襲の色彩は薄紫・萌黄・紅のものを身にまとい、ものものしい格好でない人物を「きよげに」「めでたし」の美的語詞で表現しているのである。「きよげに」「めでたし」の美的語詞の意義については多々問題があり論じられるところであるが、ここにおいては「岩波・古語辞典」の解する意義によって論を進めていきたい。

同辞典による意義の解釈は次のように説明されている。

○きよげ〔清げ〕《表面上の美、または第二流の美。キヨラが第一流の美を指したのに対する。中世になって、キヨラが使われなくなるに従い、一般的に綺麗さをいう》①（和歌の言葉づかい・人物の容姿などが）美しいさま。②（居所・調度・服装などが）見た目に綺麗なさま。③綺麗さっぱり。見事。

○めでた・し〔形ク〕《メデ（愛）イタシ（甚）の約》①申し分なくすばらしい。讃嘆する以外にない。②結構な事である。慶賀すべきである。

と説明されているところから考察を加えれば、大将は四十六歳で男

Osaka Shoin Women's University Repository

盛りである。その彼は見た目が綺麗さっぱりとしている美を描出し、また、ものものしいお召し物でないのが却って申し分なくすばらしいのであろう。ここの美意識ではとにかく、はでやかな美感でなく、綺麗さっぱりした美感が感得出来るのである。

一方、皇女に対する美的構造の特質は、年齢的には三十四歳を示しており決して若々しい人物ではない。衣装の色彩も白・薄紫・萌黄と格別目立つような色合いではない。こういう地味好みの皇女であるが、内面から静かにじみ出るような上品で奥ゆかしい美意識を「あてになまめかしき」と「あてに」と「なまめかし」を協調さすことによってその美をより一層崇高な美に熟成させているのである。「あて」の美的語詞の意義についても多々問題が残されているが、「岩波・古語辞典」の解くところの意義は次に示す如くである。

○あて〔貴〕≪「いやし」の対。高い血筋にふさわしい上品さ。必ずしもヤンゴトナシのような第一級の尊重をさすものではない≫①身分が高いこと。②上品。

とある。「なまめかし」系の美的語詞である。「なまめかし」美については、今しばらくわたくしの課題とし徐々に解決していきたい。

さて、ここに男性である大将と女性である皇女に対する美の範疇を検討してみたのであるが、大将に対する美意識は「きよげに」「めでたし」の語詞で描出し、皇女に対する美意識は「あてに」「なまめかし」の語詞で描出しているのであるが、この美的範疇で、〃事々しいお召し物でない〃〃格別目立った色合いではない〃こと、すなわち、地味な美意識を作者は讃美しているところにその美の共通性を示している。しかし、地味な美意識の中でも大将の衣装の色彩中〃紅〃が見られるが、それに対して皇女の方は〃白〃で描出されており、やや男性である大将の美意識の方が、女性である皇女の美意識よりも派手で明るい美を表現しているのは関心をひく。ところで、大将に対しては「きよげに」「めでたし」の美の描出をし、皇女に対しては「あてに」「なまめかし」と「なまめかし」美を特に意識的に用いているのは注目すべきである。作者は犀利な観察眼でもって、種々の美を区別し作品中に描き込んでいるのは、文章技巧の錬磨に秀でた一端を覗かせている。

「松浦宮物語」中にただ一例意識的に表白されている「なまめかし」美の叙述は、今まで検討してきた如く、三十四歳である皇女に対して讃美しているのである。しかし、「なまめく」「なまめかし」美の発生当初は若い人物に対してその美が捕捉されていたものと思われる。今ここで主要王朝文学作品から年齢と「なまめく」「なまめかし」の関係を顕示している箇所を逐次検討することによってその証をしてみたい。

①かくて、このおとどの、なほ絶えはて給はで時々通ひ給ふに、年月過ぎて、忠こそ十三四になりぬ。容貌きよらに心のなまめきたること限りなし。

（「宇津保物語」ただこそ・上巻）

Osaka Shoin Women's University Repository

②后のおはすると、事〳〵なく見れば、御年廿ばかりやおはすらむとおぼえて、御顔のやうたい、細くもあらず、ふくらにもあらず、よき程なるが、……中略……「日本の人は、たゞうちたれ、ひたい髪もよりかけなどしたるこそ、わがかたざまになつかしくなまめきたる事なれ」と思ひ出づるに、

（「浜松中納言物語」巻の一）

③御額髪も汗にまろがれて、わざとひねりかけたるやうにこぼれかゝりつゝ、らうたく愛敬づきたり。白くおびたゞしくしたてたる、いとけうとかりけり。かくてこそ見るべかりけれと見ゆ。十二におはすれど、かたなりにおくれたる所もなく、人がらのそびやかにて、なまめかしきさまぞかぎりなきや。桜の御衣の、なよゝかなる六ばかりに、葡萄染めの織物の袿、あはひにぎはゝしからぬを着なしたまへる、人からにもてはやされて、袖口裾の褄までをかしげなり。

（「とりかへばや物語」上）

④さて婿取り奉り給ふ。女房もとよりいと多かる殿なれば、心ことに選らせ給ひて廿人、童四人・下仕同じ数なり。さばかり物好み、昔よりもの華やかなる辺りにて、いみじうし尽し給へり男君十八にやなり給ひぬらん。女君今少しまさり給へるなるべし。御容貌有様ととのほりはてて、いみじうあてやかに、うつくしうなまめき給へり。御髪丈に多く余り給へり。ただ人に見え給はん事惜しげになん。

（「栄花物語」もとのしづく）

⑤女御殿賢子は十四五ばかりにて、いと若くうつくしげにおはしましけり。御覚え様あしく、まだしきよりしるき御気色なり。春宮大夫殿能長の女御道子、三十ばかりにものせさせ給ふ。いとあてになまめかしく、恥しげなる御有様なり。心とけず物思し知り、心深げにぞものし給ひける。御年言ひたつるには、ねびたる様なれど、見るは老い給ふべき事かは。ここはと見ゆる所なく、をかしき御人様なり。

（「栄花物語」松の下枝）

この叙述は明確に年齢が判明出来るものだけであるが、この他、若々しい媚態を表出している箇所は多々ある。（拙著「なまめかし」中で述べた。）さて、前記①「宇津保物語」中において、その年齢は「十三四になりぬ」とあり、若くて美しい盛りの媚態を描写している。②「浜松中納言物語」中においては「御年廿ばかりやおはすらむとおぼえて」とあり、③「とりかへばや物語」中においては「十二におはすれど」とあり、いずれも若い媚態を「なまめく」「なまめかし」と描写しているのである。④「栄花物語」中の叙述で、女君に対する媚態の描写であるが、その年齢は「男君十八にや給ひぬらん。女君今少しまさり給へるなるべし。」から、おおよそ二十歳位の年齢が感得出来、若い媚態の描写である。⑤「栄花物語」

Osaka Shoin Women's University Repository

中の叙述であるが、「女御殿賢子は十四五ばかりにて、いと若くうつくしげにおはしましけり」とあり、一方、「春宮大夫殿能長の女御道子、三十ばかりにものせさせ給ふ。いとあてになまめかしく、恥しげなる御有様なり」とあり、三十歳ばかりの女御道子に敢えて「なまめかし」の美を採択しているのは興味深い。しかし、三十ばかりの女御道子ではあるが、極めて若々しさを醸し出す人物であったに相違ない。

このように検討を加えてみると、「なまめく」「なまめかし」美の発生当初においては、若い人物の媚態を讃美していたものと考えられる。しかし、時代が下るに従って、その範疇も広義に使用されるようになってくる。この「松浦宮物語」中に認められた「なまめかしき」様も、皇女の三十四歳の様を讃美しているのである。年齢だけから勘案すれば決して若々しい人物ではない。さて、この「松浦宮物語」中における「なまめかし」美の叙述と、前記した⑤「栄花物語」の「なまめかし」美の叙述中において、三十代の女性を描出している点で類似性を認めるのである。今ここに併記して考察してみると、

○みこは三十四に成給ふ。しろき御そどもに。うす色もえぎなど。ことなる色あひならねど。かぎりなくあてになまめかしき御さまなり。

○春宮大夫殿能長の女御道子、三十ばかりにものせさせ給ふ。いとあてになまめかしく、恥しげなる御有様なり。心とけず物思し知り、心深げにぞものし給ひける。

このように「松浦宮物語」においては三十四歳の皇女を、また、「栄花物語」においては三十ばかりの春宮大夫殿能長の女御道子を、「あてになまめかし」と讃美し、その類似性を見ることが出来た。「なまめかし」の語の上接語においても両作品とも「あてに」という「なまめかし」系の語と協調させ、より強く「なまめかし」美を熟成しているのである。「松浦宮物語」の作者は、こういう所から考察して、「栄花物語」の作品も耽読していたのではなかろうかと思われてならない。

以上、「松浦宮物語」中に認められた「なまめかし」美の構造を追求してみたのであるが、「宇津保物語」「浜松中納言物語」の作品にみられたような「なまめく」「なまめかし」美の特徴は、そのままこの作品に継承された形跡は見られなかった。しかし、王朝時代に隆盛を極めた「なまめかし」美を「松浦宮物語」の作者はただ一語であるが意識的に採択していることは言えるのである。

注① 萩谷朴訳注「松浦宮物語」解説（角川文庫）による
注② 本文は原田芳起校注「宇津保物語」（角川文庫）による
注③ 本文は松尾聰校注「浜松中納言物語」（日本古典文学大系）による
注④ 本文は鈴木弘道著「とりかへばや物語の研究」（笠間書院）による
注⑤⑥ 本文は松村博司校註「栄花物語」（日本古典全書）による
○テキストは「續群書類從」を使用した。

くしうなまめき給へり。御髪丈に多く余り給へり。ただ人に見十歳位の年齢が感得出来、若い媚態の描写である。⑤「栄花物語」